

春一番❖三味線ライブ by 土取利行+岡大介『宮古の演歌師 鳥取春陽、添田啞蟬坊・知道 をうたう』



今春 NPO 法人魁文舎では、震災直後に立ち上げたアートによる復興支援活動「Arts for People」を再開し、2013年4月12日～14日の日程で、3回目となるアーティスト派遣を、岩手県宮古市と田老にて実施しました。

4月13日（土）『宮古の演歌師 鳥取春陽、添田啞蟬坊・知道 をうたう』と題し三味線ライブを宮古市で2日間で開催しました。今回ご協力頂いたアーティストは、世界的な音楽家・パーカッショニストの土取利行さんと、カンカラ三味線のシンガーソングライター岡大介さんのお二人。コーディネーターとして魁文舎の花光とアシスタント兼ドライバーの松本が同行しました。また現地応援として準備から公演当日まで末広町商店街

の組合の方々、思惟の会、グリーンピア、地元の社会福祉協議会や教育委員会、市史編纂室の假屋さんに多岐にわたるご協力を頂きました。皆様には改めて心より感謝申し上げます。

今回の派遣場所は2カ所。開催を午前と午後に分け、①午前11時～宮古市田老の『グリーンピア三陸みやこ』（おにぎり+豚汁付）、続いて②午後3時～宮古市商店街の『りあす亭』（地酒付）で開催しました。来場者はそれぞれ約80名、約1時間半の三味線ライブを宮古の方々に披露してきました。

今回のテーマは、宮古が生んだ大正・昭和初期の演歌師・作曲家の『鳥取春陽』。代表作『籠の鳥』で一世を風靡した演歌界の若きホープでした。この時代の演歌は今知られる「演歌」とは違い、戦争の混乱期や自由民権運動の影響を受けて若者達が街頭で演説を唄った「演説歌」を指します。春陽の師匠にあたる演歌師、添田啞蟬坊・知道がその礎を築き、当時の国や社会を痛快に皮肉った『東京節』『復興節』『ノンキ節』などを唄って、貧しくもたくましく生きる人々の応援歌としてたちまち大流行しました。時代の流れとともにこうした演歌は少しずつ忘れ去られ風化しつつありますが、それでも当時民衆の不安な心を支えたように、今回のライブが宮古の方々に前向きなエネルギーを贈れる場となるよう、心を込めて“宮古応援ライブ”を実施しました。



【1カ所目：4月13日（土）午前11時開演『グリーンピア三陸みやこ』】

宮古市田老（旧田老町）にあるグリーンピアホテルの大広間をお借りし、敷地内にある仮設住宅に住む方を対象に上演しました。田老の高台に位置するこのホテルは、かつては“避難所”として重要な役目を果たしました。ここの広大な土地は、震災後すぐに仮設住宅建設地として着工が進み、敷地内に約400戸、計3箇所の仮設団地が広がる宮古最大の仮設コミュニティを形成しています。

本番の朝、冷たい空気も心地よい見事な晴天。開演の1時間前、より沢山の方々に楽しんでほしいと、陽気な岡さんのカンカラ三味線と歌声を響かせながら仮設団地を訪問し、お声を掛けて練り歩きました。事前に配布して

いた公演チラシや、前日に飛び入り生出演した『みやこ災害FM』での告知、そして朝の練り歩きの成果もあって、開演前のロビーは公演を待つお客さんでいっぱいでした。

午前11時、いよいよ開演。ステージに土取さんと岡さんが登場し「春陽のこの曲、知ってますか？」と土取さんが会場に問いかけるも、皆さん最初は奥ゆかしくはにかむばかり。一人のお母さんを壇上へ招きマイクを渡すと、実は良くご存知で『籠の鳥』のサビ終わりで三味線を止めると「最後まで唄わせてー（笑）」と大盛り。その後も意気揚々と手拍子を付けて唄ったり、土取さんの趣深い歌声にしんみりと耳を傾けるなど、会場が不思議なぬくもりで包まれていました。

正午、来て下さった皆さんへ豚汁とおにぎりを振る舞い、一旦ライブは休憩。今度は元気印の岡さんによるカンカラ三味線の“流し”でライブ再開し、会場からのリクエストに応じていました。なんとレパートリーは、演説歌から歌謡曲まで100曲ある中から選び放題！最後は坂本九の『上を向いて歩こう』を皆で熱唱して和やかなムードで幕を下ろしました。「お陰さまで今日の天気のように晴れやかな気分になった。また是非来てください！」「知らない春陽の曲も聴けてよかった。沢山のの人に宮古の鳥取春陽を知ってもらえると嬉しいです」とコメントをいただき、終演の惜しい気持ちを胸に仮設へと戻って行かれました。この公演の様子は『岩手放送』さんが取材に来て下さり、夕方のニュースでも紹介されました。



【2カ所目：午後3時開演『りあす亭』】

本日2回目の公演先は、宮古駅から徒歩5分の商店街にある『りあす亭』。表がガラス張りの開放的なスペースで、震災後、商店街振興組合が地域の活性化を願って、もとあった呉服屋さんを改装し町の誰でも利用できる集会場を無料で運営しています。この商店街は海から1kmも離れていないため、日本一と呼ばれた宮古の10m級の防波堤も空しく、ここも津波による甚大な浸水被害を受けました。震災から約2年たった今は、日中買い物客が行きかう穏やかな商店街の姿が戻ってきていますが、中には再建が厳しく、解体され更地となった店跡や、新しく店を構えて営業する様々な事情が混在しています。

開演前、街頭のスピーカーに繋がる集会場のアナウンスや、商店街や駅前で“流し”をして、3時の公演を宣伝。ここには仮設に住む方だけでなく、春陽の歌を聴きに町のあらゆるところから集まってくださいました。またお客さんの中には、前日に立ち寄った『鳥取春陽展示ホール』の職員さんの計らいで出逢う事のできた、『春陽を唄う婦人会』元会長の中野和子さんも、ご高齢で解散してしまった当時の婦人コーラス隊と一緒に駆けつけてくださいました。コーラス隊の皆さんは、土取さんと岡さんの伴奏で『籠の鳥』を合唱し、当時をとても懐かしんでいました。春陽の歌を後世に残そうと熱心に活動を続けていた中野さん。この光景を前にハンカチで目頭

を押さえている彼女に、何か大切なものを届けられたのかな、と思えた瞬間でした。土取さんのしっとりとした弾き語る春陽作曲の『みどり節』や『すたれもの』、春陽にまつわるお話も興味深く、地元の方にとっても新たに春陽の魅力を発見した機会になったのではと思います。岡さんも春陽の『思い出した』を軽快に唄い、得意の歌謡曲の流しジョークも交えながら、ここでもあっという間の1時間半が過ぎました。新聞社『岩手日報』さんや地元情報誌の方たちも取材に来てくださり、やはり春陽は宮古の宝なのだと思えました。



震災直後から視察やダンサー派遣で宮古を訪れる度、私たちは奇跡としか言いようのない出会いを繰り返してきました。今回の支援ライブも、もともとは添田唾蟬坊・知道のライブを検討していた矢先、2月に現地リサーチで宮古に伺った時に鳥取春陽について知り、唾蟬坊たちと直結する事実にも衝撃を受けて、今回の応援ライブが形作られました。



支援ライブの前に、土取さんがYouTubeで見かけた『鳥取春陽物語』を展示ホールの方にお話しすると、その中に出演していた元婦人会リーダーの中野さんと連絡を取ってくださいました。突然の訪問でしたが快く自宅に招いてくださり、岡さんが弾き唄った『籠の鳥』に落涙し「春陽がまだいてくれた」と喜んでいました。そのあとも、今も現存する新里村（現：宮古市刈屋）にある春陽の生家を訪問し、その生家に住む春陽の兄弟の御子孫にあたる主人にも面会して春陽や集落の歴史などを伺いました。



この3回目の支援が以上の形で締めくくれたのも、地元の温かな協力に恵まれた結果です。りあす亭での公演には、震災直後2回目のダンサー派遣でお世話になった金浜福祉センターの柳沢所長さんが当日駆けつけてくださり嬉しい再会。また昨年実施した復興支援活動の一環でNYを皮切りにアメリカ東沿岸部ツアーを巡業して廻った宮古の民俗芸能「黒森神楽」の神楽衆も支援ライブを終えた夜に一席設けてくださり、この再会の喜びもひとしおでした。土取さんのために、独特の節回しと変則手拍子の付いた黒森の「祝い唄」

を披露して下さったりと心和むシーンは尽きませんでした。

私たちはアートには心を癒し満たす力があると信じています。本当の復興の日が来るまで、5年10年かかるといわれる東北沿岸の町に、これからも明日生きる活力となるような支援を模索し、実行し続けて行きたいと思えます。

(報告日：2013年6月15日 NPO 法人魁文舎松本千鶴)





鳥取春陽 (とっとり・しゅんよう)

明治 33 年 (1900 年) 刈屋村 (現在の宮古市刈屋) 北山生まれ。14 歳のとき学業半ばで東京へ出奔し、上京後明治大正演歌の創設者・添田唾蟬坊・添田さつき (知道) の強い影響を受け、演歌師となる。知道とバイオリン二重奏を初めて試みるなど、若くして才能を発揮した。17 歳より作曲活動に入り「浮草の旅」、「失恋の唄」「思い出した」「大震災の歌」などを作曲。大正 11 年には「籠の鳥」(かごのとり) をレコード化して大ヒットとなり、2 年後映画化 (帝国キネマ制作) された。大正 15 年には日本初のレコード会社専属 (歌手・作曲) としてオリエンレコードと契約し、「船頭小唄」「馬賊の唄」を吹き込み大変な人気を博した。彼の作曲活動は演歌のみにとどまらず、新民謡、歌劇、ジャズをも手がけるなど幅広い活動を続けた。昭和 7 年結核を患い大阪市住吉区の借家で 31 年の短い生涯を終えた。



土取利行 (つちとり・としゆき) <http://homepage2.nifty.com/w-perc/index.htm>

1950 年香川県生まれ。音楽家・パーカッショニスト。フリージャズ、演劇音楽、古代音楽、民族・民俗音楽など、単一のジャンルにとどまることなく世界各地で音楽活動を展開。

70 年代より近藤等則、坂本龍一らと音楽活動を展開し、ミルフォード・グレイブス、デレク・ベイリーなど海外の多くの即興演奏家とも演奏を重ねる。76 年よりピーター・ブルック国際劇団で演奏家・音楽監督として「コビュ王」「鳥のこぼし」「マハーバーラタ」「テンペスト」「ハムレット」「ティエルノ・ボカール」などを手掛ける。

87 年より郡上八幡に故・桃山晴衣と立光学舎を創立し、古代音楽の研究、日本の芸能文化再生に取り組み、アジアの多くのアーティストたちとも交流する。「人間にとって音楽とは何か」という根源的な探求と実践を深め続ける。2011 年から、演歌師添田知道に 20 年余り師事した音楽家の伴侶、故桃山晴衣の意志を継

ぎ、明治・大正の演歌の創始者、添田唾蟬坊・知道の三味線弾き唄いの会を始め、2013 年 4 月には二人の遺作 27 曲を網羅した CD『添田唾蟬坊・知道を演歌する』をリリースした。



岡大介 (おか・たいすけ) <http://okataisuke.web.fc2.com/>

明治大正演歌、昭和歌謡も唄えるシンガーソングライター。沖縄戦の捕虜収容所で配給された缶詰めの空き缶で作られた、カンカラ三線。過酷な運命を音楽に慰められ励まされて生き抜いた、反骨魂を伝えるカンカラ三味線を用いたオリジナリティ溢れるパフォーマンスで、日本の古きよき曲と唄声を今に伝えるべく唄っている。東京都内を中心に、ライブハウスや居酒屋をはじめイベント出演や施設慰問などで活躍中。2007 年 CD「かんからそんぐ〜添田唾然坊・知道を唄う〜」発売。2010 年 CD「かんからそんぐⅡ ~詩人・有馬鼓をうたう〜」発売。